ロシヤ	甲裝巡洋艦	一〇、二二〇	二二、現在一八	一八九六	艦體	鋼鐵	長一四五米突	八吋（ロシア製） 四門
					吃水	八米突四〇	巾二二米突	一五〇（スナイデルミリ カ子ー式） 十六門
					馬力	一六、五〇〇	推進機 三個	（スナイデル子ー式 二サンチ四七ミリ三七ミリ） 廿六門
					石炭積載量	二五〇〇噸	甲帶厚二五〇ミリ米突	速射 六門
リウリツク	同上	一〇、九三三	一九、五 現在一八	一八九二	船橋	七六ミリ米突		水雷發射管 五個
					艦體	鋼鐵	長一三三米突	
					吃水	八米突二〇	巾二〇米突	
					馬力	一、三二五〇	推進機 二個	砲ロシアニ同シ
					石炭積載量	二、〇〇〇噸	甲帶厚二五四ミリ米突	
アドミラルナヒモフ	同上	八五〇〇	現在一七、五	一八八五	船橋	七〇ミリ米突		水雷發射管 六個
					艦體	鋼、鐵、木	長一〇一米突	八インチ 八門
					吃水	七米突七〇	巾一八米突	六インチ 十門
					馬力	八、〇〇〇	推進機 二個	小口徑砲 四門
					石炭積載量	一二、〇〇〇噸	甲帶厚二五四ミリ米突	散彈砲 四門
					障壁厚	二三〇ミリ米突	外部皮二〇三ミリ米突	水雷發射管 四個
					船橋	七六ミリ米突		
ドミリドンスコイウラジミルモノマフ	同上	五七九六	現在一六、二	一八八三	未詳			
	同上	五七五四	現在一五、	一八八一	艦體	鋼鐵木	長九〇米突	八インチ 四門
					吃水	七米突六〇	巾一六米突	六インチ 十二門
					馬力	七〇〇〇		
					石炭積載量	四〇〇噸	推進機 二個	小口徑砲 四門
					甲帶厚	一八〇ミリ米突	外部皮三〇五ミリ米突	散彈砲 十四門
					船橋	五一ミリ米突		水雷射管 三個

アドミラルコルニロフ	巡洋艦	四、九四九	一八、五 現在一七、五	一八八七	艦體	鋼	長一〇七米突	八インチ 二門
					吃水	七米突	巾一五米突	六インチ 十四門
					馬力	八二六〇	推進機 一個	速射砲 六門
					石炭積載量	一、一〇〇噸	船橋厚六〇ミリ米突	小口徑砲 十五門
								水雷射管 六個
ラズボニツク	同上	一、三三四	現在一一、五	一八七六				
クレミアシテイ	甲裝砲艦	一、四九二	一五 現在一二、五	一八九二				
チトバジヌイ	同上	一、四九二	一五 現在一二、五	一八九七				
ギリヤク	砲艦	九六三	一三、現在一二、	一八九〇				
ソム	驅逐艦	三七〇	三一、現在二七、					
キツト	同上	三五〇	同上	同上	艦體	鋼	長六四米突	
スカツト	同上	同上	同上	同上	吃水	一米突七〇	巾五米突九	
デルフイン	同上	同上	同上	同上	馬力	六〇〇〇	推進機 二個	
カザツカ	同上	同上	同上	同上	艦體	鋼	長六一米突	
					吃水	三米突六〇	巾七米突	
					同上			

西伯利亞海軍團

艦名	艦種	排水噸數	速力	進水年
ザビヤカ	巡洋艦	一二〇〇	現在一四、五	一八七八
コルシエツ	砲艦	一二一三	現在一三、五	一八八六
マンジウリ	同上	一二二四	現在一三、二	一八八六
ポーブル	同上	九六〇	現在一二、	一八八五
シヴーチ	同上	九四三	現在一二、二	一八八四
カイダマツク	水雷砲艦	四〇〇	現在二一	一八九三
ヴサドニク	同上	同上	同上	同上
合計	二七隻	一一〇、七四九噸		

○在東洋佛國艦隊（參考）

艦名	艦種	排水噸數	進水年
ルブータブル	戰鬪艦	九、三七二	一八九六
パントルカストー	巡洋艦	八、一二三	一八九六
アミテルシヤルヲー	同上	四、七七八	一八九三
キシヤン	同上	八、二八二	一八九七
デカルト	同上	四、〇〇三	一八九四
シユアン、パール	同上	四、一〇九	一八八九
パスカル	同上	四、〇一五	一八九五
フリアン	同上	三、九四四	一八九三
シヤツスルー、ローバー	同上	三、八八五	一八九三
ピユゴー	同上	三、八七〇	一八九九
セレー	砲艦	六四七	
ヴイペール	同上	四八六	一八八一
リオン	同上	五〇三	一八八四
シユル、プリーズ	同上	六二七	一八九五
コメート	同上	四九五	一八八四
アヴアランシュ	同上	一四一	
パンガリ	報知艦	五九一	
アルエツト	同上	五〇七	
合計 一九隻		五八、三七八噸	
ニーヴ	運送船	五、九八九	
ヴアン、クトゥロン	同上	六、〇九四	
カラヴアン	同上	一、七一四	

○在東洋獨國艦隊（參考）

艦名	艦種	排水噸數	乘定員
ブラデンブルヒ	戰鬪艦	一〇、〇六三	五七〇
クルフユルストフリードクヒヴイフルヘルム	同上	同上	五七〇
ヴアイセンブルヒ	同上	同上	五七〇
ウエールト	同上	同上	五七〇
計 四隻		四〇、二四八	二、二八〇
フユルストビスマルク	大巡洋艦	一〇、八五〇	五七〇
ハンサ	同上	五、八八五	四六〇
ヘルタ	同上	五、六六〇	四六〇
カイゼリン、アウグスタ	同上	六、〇五六	四四〇
計 四隻		二八、二五一	一、九三〇
イレーネ	小巡洋艦	四、二九二	三七〇
ゲフヨン	同上	三、七六五	三〇〇
ヘラ	同上	二、〇三六	一八〇
セカテル	同上	一、六二八	一六〇
ブツサルト	小巡洋艦	一、五七四	一六〇
カイエル	同上	一、六二三	一六〇
シユフアルヘ	同上	一、一一七	一二〇
計 七隻		一六、〇三五	一、四五〇
イルチス	砲艦	八九九	一二〇
ヤグアール	同上		同上

チーゲル	同上	剏上	同上
ルフクス	同上	同上	同上
計 四隻	水雷艇	三、五九六	四八〇
	各三五〇		
計 五隻		一七五〇	二五〇
通計 二十四隻		八九、八八〇噸	六三九〇人
此外 病院船	ゲラ、	サフイア、	二隻
運送船 一二隻			

此表に徵するに、近年日本の增加せる戰鬪、巡洋諸艦に對して、露も亦同種、及び相伯仲せる武力を具へたるものを以て、之に對抗せんと試むる形跡、顯著なるものあり。但し水雷驅逐艦の數に至りては比較上、露の艦隻、我より少きを見る。蓋し水雷驅逐艦の性質は、外洋に在つて其艦隊と共に運動すべきものなり。故に露は自家の艦隊に要する丈、伴ふべき丈を他の艦と共と派遣せるものなり。外洋に於て運動する丈の兵力は既に之を送り來れるなり。

要するに、露は果して我に對して開戰するや否やは知るべからずと云へども、我に對して兎に角交戰し得る丈の準備は既に調ひ居れり。

我帝國は露に對して永遠交戰を避け得べからずとせば、或は又帝國々是の上に於て戰ふを以て、是となさば、吾人は其機會を發見すると共に直に之に對して開戰せざるべからず。借問す其機會は夫れ何の時ぞ。顧ふに今日の露に在りては、日本に當る以上の兵備をなし得べからず。然るに他日

内部の設備整理して、後顧の患去れば、更に今日に比して一層優勢の艦隊を送ることも、亦難しとせざるべし。況んや彼には多年の抱負あり、支那を侵略し、朝鮮を幷呑して、覇を東洋に爭はざるべからず。彼の野心の存する所、何ぞ其目的遂行の手段として、我を凌駕するの艦隊を備へざることあらんや。且つ彼は如上兵船の外、尚ほ現に戰闘艦二隻、巡洋艦四隻の新派を敢てし舊艦新艦相交代して其勢力を東洋に增大し、バルチックの精鋭を盡くし、歐洲方面の水軍を空虛にすることをも辭せざるなり、以て彼が意氣の何如に壯なるかを見るべし

乞ふ看よ、旅順は其東灣の設備に着手し、強大なる浚渫船を以て其港内を浚渫し、茲に船渠を築き、今年を限つて其成功を見んとするあり。此工事にして成を告ぐるに至らん乎、艦隊出入、艦體修繕の便は過去に倍層すべし。是の時に及んでは帝國の不利、夫れ計るべからざるものあらん

且つ西比利亞鐵道全通し、東清鐵道完成するの日は、彼が防備と交戰とに要する諸材料は、悉く之を陸路に依りて供給するを得べし。而して是等のものは、當今皆海路にのみ依つて來る。亦是れ他日に及んで、不利を加ふるものにあらず耶

目今戰を交ゆるに方つて、彼の據り以て賴みとする所は、浦汐、旅順の二要害あるのみ、然るに浦汐の地位は北方に偏し、旅順の防備は之が完成を期するに年あり。其他露の現に租借せる處、將に租借せんとする處、貯炭所を設けんとする處、病院を置かんとする處、是等戰時に必要ある一切の物件は、未だ一も滿足に整備せるもの莫し。時機の後るべからざる、以て知るに足らん

吾人は今日に在りて、又對馬海峽の要衝を扼し、以て旅順と浦汐とを中斷するを得。澎湖島に據りて、彼れの本國と東洋との間を遮斷するに足る。是れ何人も疑はざる所なり

噸數、武力、地位、便宜、何の點より見るも、今日の日本海軍は、露の海軍に比して優勢たるを疑はず。若し此機を逸して一兩年の後に至らん乎、彼が東洋の兵備は、俄然として左の如く新造艦を增加するを得べきなり

艦名	噸數	速力
アレキサンドル二世	九、九二七	一六、五
アレキサンドル三世	一三、六〇〇	一八、〇
チスラビヤ	一二、六七四	一八、〇
ペレスビエ	一二、六七四	一八、〇
ポロヂノー	一三、六〇〇	一八、〇
ニコライ一世	九、六七二	一四、八
オレール	一三、六〇〇	一八、〇
ポピエダ	一二、六七四	一八、〇
レトウイサン	一二、七〇〇	一八、〇
ツアレウイッチ	一二、九〇〇	一八、〇
バヤン	七、八〇〇	二一、〇
パンヤットアゾフ	六、六七五	一八、八
ワリカルゲ	六、五〇〇	二三、〇
パラダ	六、六三〇	二〇、〇
ダイヤナ	六、六三〇	二〇、〇

スウエトラナ		三、八二八	二三、〇
アスコルド		六、〇〇〇	二五、〇
オーロラ		六、六三〇	二三、〇
ボカチルエ		六、六〇〇	二三、〇
ポヤリン		六、三七五	二三、〇
未命名		六、三七五	二三、〇
未命名		二、〇〇〇	二三、〇
ノーヴヰツク		三、〇〇〇	二五、〇
未命名		六、五〇〇	二三、〇
未命名		六、五〇〇	二三、〇
合計		二一六、四三九	

之に對して我の增加する所は、僅々六千八百噸に過ぎず。彼我海軍の實力、此時に及んで當に主客地を轉倒すべし。吾人は戰を好むものにあらず、去れど若し戰ひの終に避くべからざるものなりとせば、數理上之を今日に斷行するを利とせずんばあらざるなり。況んや我が今日の軍備は、從容として、三國連合の勢を引受け、得らるゝに於てをや

參考として特に露國バルチック及黒海艦隊表を左に揭く。蓋し露國艦隊の精銳は、多く之に集中して、其以外の各艦隊には有效なる戰鬪力なければなり。又現時露の東洋艦隊中、最も有力なる軍艦は、大低バルチック艦隊中より分遣せるものとす。而して黒海艦隊はダーダネル海峽を通過するに當つて國際條約上、牽制せらるゝ所あるは世人の既に知れるが如し

バルチック艦隊

艦名	艦種	噸數	進水年			
ボルタヴア	戰鬪	一〇九六〇	一八九四年	リンダ	巡	三五〇八	一八八五
ペトロパウロスウ	同	一〇九六〇	同	アシア	同	二五〇〇	一八七八
セヴアストポール	同	一〇九六〇	同	アフリカ	同	二五九〇	一八七五
ナヴアリン	同	九四七六	一八九五	外 コルヴエツト	四隻	水雷砲艦	四隻
アレキサンドル二世	同	九九二七	一八九一	スループ	四隻	砲艦	五隻
ニコライ一世	同	九六七二	一八八七	破壞艦	一隻	一等水雷艇	三五隻
シツソイウエエリキ		九〇〇〇	一八八九	二等水雷艇	七六隻		
ピヨートルウエリキ		九八九一	一八九八	黒海艦隊			
ペレスウエット		一二六七四	同	カザリン二世	戰鬪	一〇一八一	一八八六
オスラビア		一二六七四	同	ナエスマ		一〇一八一	同
ルーリツク		一〇九三三	一八九六	シノープ		一〇八一一	一八八七
ロシア	巡洋	一二二〇〇	一八九九	アポストロフ		八〇七六	一八九〇
スウエトラナ	同	三八二八	一八八八	ポビードノセツツ		一〇二八〇	一八九二
アドミラルナヒモフ	同	八五〇〇	一八九五	トリスヴイアチレリア		一二四八〇	同
パミアツトアゾバ	同	六六七五	一八九六	ロスチスラフ		八八八〇	一八九六
ウラヂーミルモノマフ	同	六〇〇〇	一八八八	ノヴゴロツト	海防	二七〇六	一八九二
ドミトリードンスコイ	同	五八〇〇	一八八三	ポトフ	同	三五九六	一八七三
アドミラルコルニロフ	巡	五八〇〇	一八八七	パヨアツトメルクリア	巡洋	三〇〇〇	一八八〇
グロモボイ	同	一二一三六	一八九九	外 水雷砲艦	三隻	砲艦	六隻
ダイアナ	同	六六三〇	同	一等水雷艇	二二隻	二等水雷艇	一一隻
パラダ	同	六六三〇	同				
オーロラ	同	六六三〇	同				

第二節　日露の陸軍

帝國の軍事に關しては、國民の義務として秘密を守るべき所多し。而して吾人亦何如なる點が秘密に屬すべきや、何如なる點が之に屬せざるやを識別するに苦む。故に帝國の軍事に關しては、吾人概ね之を記るさざるを以て、善とせずんばあらざるなり

露國常備軍の現役は五ヶ年にして、豫備役は十三年、其後は後備即ち國民軍に編入す。軍務大臣の權能により、敎育あるものゝ爲めに適宜現役を減ずることあり。コザック兵の組織は前者に異りて、滿十八歲に達すれば軍籍に入れ、之より三年を豫科となし、更に十二年間本務に服す。豫科を終つてよりは、全員三分一のみ兵役に服し、三分二は當人の隨意となし、十二年中、後五年間は豫備役なり。中には年限なく終始服從するものもなきにあらず。兵役に服する者は、身體健全にして充分戰鬪に堪へ得るものを撰べり

全露に於ける戰時編製の陸軍は左の如し（要塞兵を除く）

野戰兵

參謀本部高等司令官			三五〇〇
歩兵及銃兵	八百五十五隊	八四、三二六三	
常備歩兵	三十四大隊	三、三三八八	
常備騎兵	三百六十中隊	五、七四六七	
野戰砲兵	三百五十三中隊	七、七五九四	
工兵	三十六中隊二分の一	二、九九四四	
地雷兵	八中隊		
鐵道兵	六大隊		
各種輜重及攻城廠		一四　二九八	
コサック騎兵	百八十五大隊	三、一七六五	
砲騎兵	十四中隊		
計		一二六、三二一三	

コサック兵

ドン騎兵	三百　十八中隊	五、三〇九二	
クーバン騎兵	百九十六中隊	二、九一二九	
クーバン歩兵	四十八中隊	九〇八四	
テレツク騎兵	六十六中隊	九八六四	
アストラハン騎兵	十二中隊	一七九四	
ウラル騎兵	四十九中隊	七五一五	
オーレンゴルグ騎兵	百四十中隊	一、五五九五	
シベリヤ、セミレチエンスク、ザバイカル、アムール、ツスリー騎兵	九十三中隊	一、五五九五	
同騎砲兵	三十八中隊	七〇三〇	
ザバイカル歩兵	三十中隊	六六九六	
アムール歩兵	六中隊		
計		一五、四〇一四	

第一豫備兵

歩兵	百〇五聯隊	四〇、六九五六	
騎兵	百〇九大隊	一〇、六一六六	
重砲兵	二中隊		
輕砲兵	百七十二中隊	二、〇〇五四	
鍬兵	三十四中隊	八一九四	
鐵道兵	三大隊	三二一	
計		五四、四五七八	

第二豫備兵

歩兵及銃兵	二百一大隊	二二、七七三三	
騎兵	百十二大隊	二、〇七二〇	
芬蘭騎兵	一中隊	一八四	
砲兵	四十八中隊	二、九一三六	
鍬兵	四中隊	五一六〇	
騎兵	五十六分隊	七五六〇	
計		二九、〇四九三	
合計		二二五、二二九八	

露の軍制は歐羅巴、亞細亞の二大軍に分ち、歐軍をワルシャワ、ウ井リナ、オデッサ、フインランド、カフカース、トルキスタン、ドン、モスクワ、ペテルブルグ等十二軍管に分ち、亞軍を東部シベリア、西部シベリヤ、トルキスタンの三軍管に分ち、各々其防禦する所の方面を一定せらる

然るに此二百萬の大軍は、東方有事の日に方つて善く其用を爲し得る乎と云ふに、そは極めて困難にして到底實行すべからざる所なり。今歐軍を東方に輸送せんとするには、海上の危險を避くるが爲めに、西比利鐵道に據るの外なからん、同鐵道に據る者とすれば、先づ其速力及運搬力を研究せざる可らず。同鐵道(及び東清鐵道)の首府より旅順までの距離を八千七百七十八露里と定め、一時間の平均速力を廿五露里とし、而して此距離を疾走する時は、日子を要すること正に十三日なるべし。去れど斯かる粗造の鐵路に在つては、一時間廿五露里の平均速力を出すことは其最大速力たらん。且つ途上、石炭、水を積み、他の瀠車に聯接又は待合はし、或は不意の遲延の爲めに要する時間等を算入して、四日を要するものと豫定せん乎、全線を走過するに要する所約十七日なるべし。故に一瀠車が輸送を全ふして發車地に引返し、更に輸送を始る迄には先づ三十四日を要するものとせざるべからず。尚は此上に

樣々の故障あるものとすれば、今一層の時日を費すならん。果して然らんには、軍隊を輸送するに方つて幾何の列車を發し得る乎。即ち如上の速力を以て走驅して、途中何等の故障なしとすれば。毎四時間に一列車、一日六回の列車を發するを得ん。而して一列車の運搬容量を携帶品と共に、五百人と假定する時は、一日、三千人を發送し得べきなり

同鐵道の疾走日子と運搬力とは斯の如し。然るに露國の軍制は、動員に於て極めて不便多き所あり。單に一地方の師團を編成するに方つても、全國の動員を行はざれば、之が編成を結了する能はず。是れ實に彼れの大欠點に屬し、其手續の繁雜なること、數多の日子を要することは、到底至便なる我編制に及ぶべくもあらざるなり。故に鐵道走過の日子は十七日にして足るとするも、尚は其上動員に要すべき日子を算入せざれば、彼が軍隊の到着日限を確知し能はざるべし。而して以上諸般の手續を合計して、彼が東方へ送兵する日所、約三ヶ月ならざるべからずと信ず

露は又其編制上、我國の歩兵を中堅とするに反して、砲兵を以て其主力となせり。而して彼れの陸軍砲は、最新式八サンチ砲を用ゐ、之が命中距離三千米突に及び、精鋭

比なし。之に對する我陸軍砲は、從來二千五百米突に留まり、彼と對抗上稍々遜色ありしものゝ如し。去れど其後幸にして三十年式七サンチ半の有坂速射砲の發明あり、國民は漸く其心を安んずるを得べし。且つ此砲は其製造上、內國及海外の各製造所に注文し、昨年々末を期して準備悉皆整理すべき豫定なりしを以て、今後兩國の間、何時平和の破裂を生ずることあるも、防備進攻の上に於て、最早憂慮すべき所、毫も之あらざるなり

然り而して彼に最も欠くる所は其兵糧なり。平和の今日に在りて、彼は尙は西比利亞東部の自活を全ふすること容易ならず、若し夫れ交戰の際に至らん乎、滿州及海上の糧路は、渾て皆絕斷せん。彼は戰外の大敵に對して、先づ降を乞はざるべからざる不幸の地位に在り

又彼の浦汐斯德に於ける海岸防禦に就て、未だ速射砲の設備あるなし。願ふに不完全なる旅順の防禦に至つては、尙は一層之に及ばざるものあらん（現下の實況にして今後の設備に非ず）更に彼が東洋方面には、兵船は勿論、軍隊に供給すべき完全なる兵器製造所なし。旅順の兵器修理所は、未だ以て最新式の速射砲及連發銃に消費すべき多數の彈丸を一時に充分供給するに耐へず。浦汐斯德に於ても然り。故に陸海に大戰あるの日は、

他に就て其供給を求めざるべからざるの不便あり

歩兵の優劣に至つては、到底比較の要を見ず。唯我陸軍の、以て憂苦とする所は、騎兵及輜重運送の事なり。抑も帝國の地位と實力とは、退守に難く進攻に便にして、國民も亦敵手の襲來を豫想せず。然るに大陸は輜重と馬匹となり。而して是れ一たび日清戰役に於て實驗を經たる所、我軍の欠點は實に此一點に在り。今露人の軍情を察するに、彼は本來馬上天下を制し來りたるものなれば、其馬匹の集聚に不足あらざるは勿論、之を馭するの方法に於て、亦我に勝る所多きを見る。假令ば、通常我陸軍に在りては、騎兵或は調馬師の馬を馭すること、多くして四五頭に出づるを得ずと雖も、露人に在つては、一人にして容易に十頭を扱ふを得るなり。思ふに是れ、馬性の彼と我と柔剛を異にするに因る歟、而かも馬匹驅使法の巧拙は、獨り騎兵の運動に影響あるのみならずして、又砲兵の進退に關するものあり。吾人は此點に於て、我武勇なる陸軍の、稍々露兵に讓る所あるを遺憾とせずんばあらず

且つ一面に在つて、又我國の馬匹は、日清戰役に於て損失せる所頗る少なからず。其結果、今後大陸進軍の必要あるに方つては、益々其欠乏を訴ふる所あらん。故に一朝

露と兵馬相見ゆる際には、頼む所は滿州の馬匹ならざるべからず。滿州の馬匹にして能く我が需要に供するを得ん乎。輜重の事は、復た憂ふるに足らざるべし。然るに滿州は不幸にして既に殆んど露人の手に入れり。吾人は乃ち此馬匹集聚の一點に於て、更に一段の苦心を加へざるを得んや

第三節　日露各個の戰略

彼我海陸軍實力上の比較は、既に其要領を擧げたるを覺ふ。吾人は之より實戰に入らんと欲す

第一　露國の戰略

由來吾人は屢々露國軍人の日本攻略法を耳にするを得たり、或者は對島の占領を說き、或者は馬關海峽の切斷を策し、或者は敦賀灣の上陸を可とする等、其論極めて區々、然れども此徒の眼界尙は甚だ狹隘に陷り、多くは未だ大局の上に通せざる者のみなるを憾とせずんばあらず。唯左に揭ぐる所のノウオ、ウレミヤの所說に至つては、着眼頗る前者と異にして往々吾人の注意を引くに足る者あり、取つて以て露國有識者の日本に對する觀念の何如なるかを推察し、合せて我軍略上幾分の參考に資するを得ん

吾人の敵國は近今日本の軍備を擴張し、日露の交戰を夢想して頻りに妄論を逞ふするを見る、就中甚き者に至りては、日露干戈相見ゆるの際、必勝の名譽は疑も無く日本軍の上に冠せられんと放言して辭せざる者の如し、吾人は彼れ英字新聞が故意に斯の如く片腹痛き言議を敢てするを見、窃かに失笑を禁ずる能はずと雖も、世上時に此愚說の爲めに惑はさるゝ者あるべきを顧ひ、概要左に兩國の兵備を較論して聊か敎ゆる所あらんとす

千八百九十六年、日本の皇帝は勅詔を發して未熟なる日本軍隊の改善と增加とを下命せられたり、其勅詔に依れば從來六師團なりし者を十三師團に增加し、更に十三個騎兵聯隊、十三個砲兵聯隊、十三個工兵大隊、十三個輜重兵大隊、四個要塞砲兵聯隊とを組織せらるゝことゝなりぬ。此過大なる軍備擴張の完成期は千九百二年の豫定なれば、本年度に於ては略其目的を達したる者と稱するを得べし。去れば日本

の兵數を知らんとするには、常備兵十三萬三千五百人、其他八百の將校、一萬九千頭の軍馬、後備兵及北海道、對馬の民兵を合算すれば足るなり

然れども以上は唯文字の上に見はれたる兵數のみ、若し夫れ眞個兩國間に兵馬相見ゆることありとせば、一層嚴密なる觀察を加へて其調査に從はざるべからず、之を例せば日本は西比利亞に向つて何如なる編成を以て幾許の陸兵を運送し得るか、其本國警備の爲めに幾許の陸軍を要するか等の問題是れなり。蓋し思ふに、日本は步騎砲工の全常備軍十七萬人を擧て悉く西比利亞滿洲の地方に送り得べしとするも、其對馬、北海道の民兵及び豫備、後備、國民軍の各兵迄、數を盡して海外に遠征せしめんことは容易に企圖すべき所にあらざらん。夫の日清戰爭の時に方り、遼東の野に戰ひたる日軍の總數は八萬にして、第四、近衞の二師團は始め本國の守禦に任じ、後去つて臺灣の征討に從ひたるより推すも、當時日本の動員は其全數に於て僅々十萬の寡兵に過ぎざりしなり

故に開戰の際に於て、日本現時の兵數が實力として顯はれ來る者を算定する時は

(一) 現時の兵數は紙上の空文字にして悉く實地の用に充つべき者にあらず

(二) 日本が攻擊の爲めに運送すべき兵の實數は、十二三萬を限り、最大多額とし

て十五萬を超ゆること能はず

(三) 常備、豫備、後備を合して日本の兵數は三十八萬人に上ると雖も、常備の外は其兵羸弱にして用に耐へず、之を以て我兵に當らんことは覺束なし、畢竟內國の防禦に充つるに止る

(四) 然れば則ち日本か海外に送るべき兵數は、漸く十二三萬、乃至十五萬に過ぎざる也、此以外に在つては、縱へ動員を行ふとするも、毫も有效なる結果を收むること能はず

若し夫れ我陸軍に在つては、千九百年亞露に駐屯せる者左の如し

(一) 千九百年三月十九日支那國境(セミパラチンスク及トルキスタンを除く)及黑龍江沿岸に五萬九千三百五十人、關東省に一萬三千四百二十人、其他の西比利亞地方に一萬五千百六十八人

(二) 同日以後新に編成されたる兵員は一萬七千二百人を加へたり

(三) 新募兵西比利亞軍團に四萬六千人、外に胡索克一萬七千五百人を加へ、以上合計十六萬九千人の大兵ありしが、其後著る(四) 尙は北淸鐵道守備の爲め千九百年の始めに四千五百人ありしが、

しき增加ありたり

故に我露軍は日軍の十二三萬乃至十五萬の寡兵に對して十七萬八千人の優勢を占むる者と言ふを得べし、況んや今年の豫算に於て、露は能く一令の下に二十二萬の大兵を興し、以て西比利亞地方の敵軍に向つて第一の攻擊を爲さしめ得るに至るべしと稱せるに於てをや

且つ我新募兵は其募集當時に於てこそ、幾分か兵氣と組織の點に就て憂ふる所あり、爲いに支那の暴徒を鎭壓するに躊躇したるも、號令一び下るに及んで、彼等は實に驚くべき精銳の兵として其技倆を顯はすに至れり。此新募兵は今や紀律と軍器とに於て、決して常備軍に劣る者に非ずして、好個の防備軍として太平洋岸を固守するに足る者と確信せらる。加ふるに其身中に充溢せる至壯至烈の愛國心は夫の勇悍なる黃色人種の入寇者に向て充分手痛き攻擊を與ること必定なるべし

又我露國が二十萬の大兵を動かすことに至つても、其容易なるは猶ほ大人が自家の指頭を動かすが如きのみ、試に看よ昨年北淸の事變あるに方つて、我動員が何如に迅速に何如に靜穩に行はれたるか、之を夫の日本が僅々の小兵を送るにだに、內國に於て紛擾の音と嘲罵の聲の續起して反響せるに比較せよ、我二十萬は漸く一

小地方の動員に過ぎずして彼れの十五萬は擧國極力の大業なり、而して相互間其成蹟の差異ある既に斯の如し、以て彼我攻守の難易、同日の論に非るを知るに足らん

更に兵備上兩國間差違の存する所を約言すれば次の如し

(一) 黑龍江畔に駐屯せる十萬九百人の露兵は略々日本の進攻兵數と相均し、而して我には尙ほ西比利亞軍團數萬の兵の之に加はるべきあり、即ち我兵員の數は彼に比して優勢を占めたるを知るべし

(二) 我兵の軍器と勇氣と彼に優るあるは論なく、特に彼より來つて我と交戰すべき者は唯十五萬の常備軍あるのみなり

(三) 十七萬の動員は我に於て一擧手の勞なれども、十五萬の進軍は彼に在つて擧國極力の大業なり

(四) 十七萬の動員は我に於て單に前衛たるに過ぎざる姿ありて、其背後には幾百萬の精兵、滿を持して控へ居れども、彼れの十五萬には僅々常備兵二萬と豫備、後備、民兵の後詰あるに過ぎず、而して後者に至つては銃槍を執つて軍陣に臨み得る技倆あるものに非るなり

畢竟彼が臥薪嘗膽の大憤發を以て訓練せる十五萬の兵も、我前衛との交戰にだに、必勝を期し難き憐れなる運命に立てる者なり

日本人が常に誇稱するが如く、一個の日兵は能く四個の露兵に敵し、又能く十個の清兵に當るべしとの言は、よし之を事實ならずとするも、日本軍人の勇氣は誠に畏敬すべき者あり。夫の日清及北清の戰爭に就て見るも、彼等が耐忍力、冒險心、及び兵士の突貫に長せること、士官が近世の教育を受け居ること等は、吾人も決して之を否定するを欲せず。然れども其所謂る長所は我兵以外の列國兵に比してのみ一日の長たるに止まり、必ずしも我兵に對して同樣の長所ありと云ふにはあらず。日軍の長所は却て是れ我長所のみ、況んや彼は攻擊の地位に立ち、我は防守の姿勢を取るに方り、我兵特に愛國の念勃興して、流石勇悍の稱ある日軍を粉碎し去らんは、深く疑ふべくもあらず。且つ彼我主客の地位の差異あるが爲めに、日軍は一步を進むれば一步其國を遠ざかり、而して其軍隊と本國との聯絡を保持するものは、獨り軍艦の通信あるのみなれども我に在りては一條の電線を以て自由に百用に充つるを得べく、進退の利便の彼に勝る者萬々なる固より其所なり今日淸役後迅速なる彼が海軍の擴張を見るに、千九百一年に於て其艦隊力正に左の如し

一等戰鬪艦	六隻	戰鬪海防艦	二隻
三等巡洋艦	五隻	海防砲艦	二十六隻
一等砲艦	二十五隻	二等砲艦	二十三隻

甲鐵巡洋艦	六隻	甲裝巡洋艦	九隻
水雷母艦	四隻	水雷驅逐艦	十二隻
合計	百〇八隻		

右の內より砲艦及水雷母艦を除き、日本海軍が自由に敵と戰鬪し得べき者を擧れば、僅に三十隻に滿たず、其三十隻の內にも陸兵の護送、糧食、彈藥の輸送に用ゆべきものを除去すれば、日本海軍の攻擊的實力は極めて微々たる者となるべし

之に對する同年度の我東洋艦隊は

一等戰鬪艦	五隻	中鐵巡洋艦	六隻
甲鐵砲艦	三隻	水雷母艦	四隻
海防砲艦	八隻	運送船其他	九隻

甲裝巡洋艦	一隻	二等巡洋艦	二隻
水雷驅逐艦	二隻	砲艦	十一隻
碎氷船	二隻	合計	五十七隻

漠然艦數の上より見れば、日本の海軍力は我東洋艦隊に二倍する者の如くなれ共、彼が百八隻中、其過半は實際戰鬪に加はるの能力なく、又加はり得る者に非ず。之に反して我五十七隻は、何の顧慮する所も無く自由に戰鬪に從事し得べし。且つ海軍力に缺欠を訴ふるの時に際しても、我は直に各方面より數十の堅艦を急派し得べくして、彼は何等の工夫を凝らすも復た此補欠の方法を發見すべからず、故に我海軍が彼れの海軍を擊破全滅して制海の權力を獨占するは必ずしも難事に非るなり

夫の日本兵が馬を黑龍江畔に飮まし、日章旗を滿洲の沃野に飜へすに至らんことを唱ふる者は、畢竟是れ痴人一場の夢たるに過ぎず

第二　日本の戰略

露人の見る所彼れの如し。現今の情勢に在つて日露の間、不幸にして兵馬相見るの酸事ありたりとせば、我軍は能く露兵を粉碎して、最終の勝利を博し得べき乎何如ん

此問題に對し、吾人は多言を要せずして答へ得べし、曰く、現時の狀勢に於て、日本軍は能く露軍に勝ち得べく、又能く最終の勝利(戰爭の報償)をも制し得べしと

然らば則ち我軍は、何如にして能く彼に勝ち、何如にして彼に城下の盟を爲さしめ得べき乎

此問題を解釋せんが爲めに、吾人は之を二個に分說するの至當なるを認む

第一問　何如にして我軍は能く露軍に勝ち得べき乎

此問題は形以上、形以下の二方面より解釋を試みざるべからず。即ち一は彼我の數

を知り、他は士氣、紀律、技術、鍛練等より、兩々相較するを要す

(甲)　數の上より較算する時は

彼は我十二師團に對し、彼れの全領土に於て二百萬餘の大兵を有す。單に數の上より打算する時は、到底當るべからざるもの、如し。然れども彼は其國の位置、國內の狀勢、隣邦との關係より、我國の如く一兵をも剩さず出兵することを能はざるを以て、假令二百萬は五百萬の兵を有すとも、我に於て意とするを要せず。吾人は唯彼我の、戰鬪に參與し得べき兵力の多寡を算し、以て成竹を下すべきのみ

吾人の信ずる所に依れば、彼は貝加爾湖以東に有する所の兵力以外に於て、大多數の兵を送致せんことを極めて難事に屬す。そは極東に開始されたる合戰の際、彼が之に要する諸物貨を供給するの道は、單に歐洲よりする鐵道の一途あるのみ。然るに此鐵道たるや、漸くにして貫通せる單線にして、他に補助の一線だもあるなきを以て、之に依つて其軍隊の需要する兵糧、彈藥、其他の諸物資、及び東方數十萬の住民に對し、其欠くべからざる食糧を、一時に供給せんことは、到底不可能的の事たるを免れざればなり

他に海路より輸送するの途なきに非るも、一旦我兵にして彼地に上陸する數、若く

は艦隊を以て臺灣澎湖の邊を扼守し、幷せて對島朝鮮の海峽を遮斷せん歟、彼が海路の交通は之に依つて全く杜絶されたるものと見做さゞるべからず。よし、又其海路は尙ほ安全に航行し得るとするも、苟も我兵にして彼地に屯在する以上は、一包の彈藥、一袋の麥粉と云へども、露兵の手に渡さんことを許さゞるべし。故に此航路は、我兵の未だ彼地に上陸せざる歟、或は我艦隊力を破碎したる場合にのみ使用するを得べし。

然らば則ち彼等の艦隊力は如何ん。吾人が曩きに日露の海軍の條下に於て其表を示せるが如く、數の上の成敗は、歴然として爭ふべからざるものあり。縱令彼は新たにバルチック艦隊を派遣し來るも、其遠く極東に迄出でゝ戰闘し得べきものは、今時の東洋艦隊と同額位の噸數を有するに過ぎず、而かも極東に到着するには殆ど六十日の日子を要し、到底現在の東洋艦隊と同時に協力して運動することを能はざるべし。故に彼が極東の海軍力は、依然として現在の儘なりと稱するも可なり。何となれば、何程の海軍力を有する敵なり共、同時に運動し得ざるものは、我に在つて個々別々に之と戰ふを得べければなり。此の如く、我の海軍力は、數の上に於て既に優等なるのみならず、又技術經驗の上に於て、他に勝る所頗る多く、敎育、勇氣、紀律、練達

の點に於ても、一として之に讓る所なし。殊に天賦の敏捷なる特質に至つては、一般白哲人を驚倒せしむるに足るものあり。故に露の艦隊力を以て吾海軍力を破碎し、其戰闘力を全滅し及び之を一港灣に封鎖して、自家の航通を自由ならしめんことは到底其目的を達すべからず。

去らば陸兵の戰闘力は如何ん。最近の調査に依れば彼は

後貝加爾州に於て

十大隊	騎兵	二十一中隊	
二中隊			

黑龍州に於て

約二大隊	騎兵	六中隊	
一中隊			

沿海州に於て

二十大隊	騎兵	十中隊	
三中隊	要塞砲兵	八中隊	
二中隊			

滿州各地及遼東に於て

二十七大隊	騎兵	二十中隊	
十中隊	要塞砲兵	八中隊	
一中隊			

合計

歩兵	五十九大隊		
騎兵	五十七中隊		
砲兵	十六中隊		
要塞砲兵	十六中隊		
工兵	三中隊		

此他水雷、電信、鐵道隊等の少許あり

以上の諸隊は、日露の交戰に當りて、其戰闘に加はり得べきは勿論、尙ほ之と同數、若くは一倍半位迄の兵力は、歐露及び西部中部の西比利亞各地より出兵し來るべし。

然れども是等は總て交戰の初期より集中し得べきものに非ずして、初期に於ては現在屯駐せる兵數のみに止ることを忘るべからず。元來戰術の原則として、敵兵を個々に分割せしめ、別々に之を打破するは極めて肝要なる事に屬す。此の如くする時は、其戰鬪頗る容易なるの利あればなり

然れば則ち、兩國陸兵の當初に於ける衝突は、沿海州各地の兵、及び滿州の琿春に屯在せる部隊のみなるべく、其他の滿州各地、及び黑龍江州、後貝加爾州等の兵は、時日の上より、決して此第一の戰鬪には加はることを得ざるべし

元來交戰に當りては、彼我兩國の艦隊は、其目的とする所、概ね同軌に出づる者なるを以て、苟も安全に海を渡つて敵國を衝かんと欲せば、其敵艦隊を全滅する歟、若くは之を封鎖して而る後陸兵を輸送するに如くはなし。是れ固より萬全の策たるを疑はず。然れども用兵の原則は神速に存するを以て、徒らに安全のみをも期すべきにあらず。若し強ゐて萬全を希はゞ寧ろ戰はざるに勝るの安全ある可らず。故に或る場合に於ては、甘んじて或る程度迄の危險を犯さゞる可らざることは戰時に在つて特に屢々之を見る所なり

今日露の交戰に際しても、我陸兵の輸送は、全く露の艦隊を破碎する乎、悉く之を威

港灣に封鎖し終りたる後に於てせば、其安全なるは固より言を俟たず。去れど斯くする時は、空く多くの日子を費し、前途の大事を誤るの虞あるを以て、兩國交戰の劈頭一發すると同時に、敵艦の位置狀勢等より見て、能く我運送船をして危害なく某地點に上陸せしめ得べきの成竹あるに於ては、強ち敵艦の全滅を待つを要せず、否寧ろ之を待つこと能はざるなり。即ち敵艦の位置及狀勢に依りては、直に陸兵を輸送して、一日も速かに彼れの主腦を衝くを要す

今我艦隊の偵察報告等に要する日數を、假りに七日間と見積り（敢て七日を要せざるべきも可、成敵に多くの利を與へて打算するは、戰術の原則なり）即日陸兵を出發せしめん乎、出兵地に依り、多少の差異あるを免れざるべきも、吾人が期する所を以てすれば、航海日數三日、上陸日數六日、乃至七日を見積らざるべからず、（乘船は我艦隊偵察中に結了したるものとす）然る時は、交戰の布告より我陸兵の目的地に上陸する迄には實に十六乃至十七の日子を費すべきなり

然るに彼は此間に於て、幾何の兵を準備して我上陸軍に抗拒し得べき乎。現在彼が極東の地（即ち日本海沿岸）に於て有する兵數は實に左の如し

韓國境上ノウオキーエフスク及びポシエット灣に於て

西比利亞狙撃歩兵	四大隊	
西比利亞砲兵旅團の中	一中隊	砲八門
要塞砲兵の一部	約一中隊	
要塞水雷隊	一中隊	

バラバーシに於て

西比利亞狙撃歩兵	二大隊	
後貝加爾哥薩克騎兵	一中隊	
浦鹽斯德に於て		
東西比利亞戰列歩兵	二大隊	
後貝加爾哥薩克騎兵チチンスキー	一中隊	
要塞歩兵	六大隊	
同　砲兵	六中隊	
同　工兵	一中隊	

に過ぎず、就中、在ニコライスク衛戍兵の如きは、其位置甚く一偶に偏し、殊に多期間に在つては互に相救援すること能ばずして、全く獨立の運動を取らざるを得ざるものとす

更にアラズドリヌイ、ニコリスク、ハバロフカの兵は、浦鹽斯德、バラバーシ等に分派し、琿春のものはノウオキーエフスクに合したるものとするも、現に其各地に屯在するものは左の如きに止る

同水雷隊	一中隊	
烏蘇利鐵道大隊	二中隊	

ニコライスクに於て

東西比利亞戰列歩兵	一大隊	
要塞砲兵	一中隊	
黒龍水雷中隊	一中隊	
合計　歩兵	二十一大隊（要塞歩兵をも加算す）	
騎兵	二中隊	
砲兵	一中隊	
要塞砲兵	八中隊	
要塞工兵	一中隊	
要塞水雷隊	三中隊（黒龍水雷隊を加ふ）	
鐵道隊	二中隊	

アラズドリヌイ

西比利亞狙撃歩兵	二大隊	
沿海州龍騎兵	六中隊	内大部分は旅順其他に分派す

ニコリスク

西比利亞狙撃歩兵	二大隊	
後貝加爾哥薩克騎兵チチンスキー	四中隊	
西比利亞砲兵旅團の中	一中隊	山砲

ハバロフカ

地方大隊	一大隊	
烏蘇利哥薩克騎兵	二中隊	

以上の諸隊を前述の如く沿岸各地に分派する時は實に左の如くなるべし

浦汐斯德及バラバーシ方面

歩兵	九大隊	
騎兵	約十中隊	
砲兵	三中隊	
要塞歩兵	六大隊	
同　工兵	三中隊	
同水雷隊	一中隊	
哈拉賓		
西比利亞狙撃歩兵	二大隊	
西比利亞戰列歩兵	一大隊	
計　歩兵	三大隊	
豫備砲兵	二中隊	
西比利亞工兵隊	二中隊	
西比利亞電信隊	一中隊	

滿州吉林省琿春地方

西比利亞狙撃歩兵	六大隊	
烏蘇利哥薩克の内	一中隊	
後貝加爾哥薩克騎兵チチンスキーの内	一中隊	
西比利亞砲兵旅團の内	一中隊	山砲
臼砲隊の内	一中隊	
重砲隊の内	一中隊	

ノウオキースク及バシエット方面

電信隊	一中隊	
鐵道隊	一中隊	
歩兵	十大隊	
騎兵	二中隊	
砲兵　各種	四中隊	
要塞砲兵の内	一部隊	
要塞水雷隊	一中隊	

現今東方駐屯の露兵は、幾分此表に比して増加し居るべし、然れ共其増兵は本年は無論今一兩年を經過すと雖も成敗の上に於て決して本論の根底を動かす迄に至らざる也

沿海に於て、交戰第一回の衝突迄に、彼れの軍は右の如き數を得るに過ぎず。故に、我軍にして此數以上の兵力を輸送せば、其第一回の衝突に於て、勝利の、我に歸すること決して疑ふべきにあらざるなり。而して我國現今の狀勢に於て、第一回衝突の爲めに此の如き兵數を輸送することは、素より容易の業にあらずと雖も、去りとて又斷じて不可能の事にあらず

我海軍にして未だ全勝を博せざるの間は、優勢の兵力を輸送せんことは、安全且つ容易の業にあらざるべしと雖も、既に敵の兵數を知り、又能く優勢の兵力を輸送したる上は、第一回の衝突の我軍の勝利に歸する我は論なし。第一回既に然り、爾後の交戰は、復た苦心を要せざるべし。何となれば、海外の敵國と交戰するの困難は、其困難戰鬪上よりも寧ろ輸送上に存するものなればなり

攻擊點及び上陸點の何如は、我兵力の多寡に對して至大の關係を有するは勿論なるも、吾人の所見を以てすれば、戰鬪の最初期には、唯我混成の二個師團にて充分なるべく、爾後漸次兵力を增大するとも、尙ほ約十個師團にて此戰爭の終結を見得らるべきなり。蓋し前きに述べたるが如く、露國は何如なる方法を以てしても、今日極東に配備せる兵數の一倍、若くは一倍半以上の兵力を增加することは能はず。然るに

我は之に對して混成の十個師團あり。其優勝權の我手は歸せんことは、毫も疑ふを要せざるべし

此の如く、我國は數の上に於て、敵に優るの兵力を輸送し得べきこと明白なり。更に形以上の點に於ける彼我の比較は、何如なる結果を見るべき乎

(乙) 士氣、敎育、體力、經驗、敏捷の度等より比較せる日露の優劣

吾人の所見に依れば、由來露兵は其士氣、敎育、經驗、紀律等の各點に於て遙かに我兵の下にある者と云ふべし。唯體力の一點に至つては、我兵に比し何分の長なきにあらず。然れども我兵は又健康の點に於て彼に勝り、敏捷の度に於て殆んど比較すべからざる差違あるを發見すべし。直言すれば、彼れの魯鈍痴愚なる事は、吾人殆ど之を形容するの詞なきに苦ひ程なり。去れど彼は又其愚鈍と優等なる體力とを以て能く困苦と欠乏とに耐へ、而して辛抱强くして百敗に懲りざるとは、吾人の最も恐るべき所となす。想ふに彼が此特性は、彼も亦自ら長所として依賴し利用する所ならん。看よ、彼れの歷史は此特性に依りて、天下無双のナポレオンの攻擊に當り、名將シャルル十二世との長々しき交戰を繼續し、最も精悍にして健鬪者たる土耳古族の領土に侵入し、而して一として最後の勝利を博せざるなきを證するに非ずや、吾

人、亦、宜、く先づ彼れの特長を知り、之に對して巧みに我長所を施こさば、彼をして其長ずる所を恣にせしめざるは、事易々たるべきのみ

無形有形、其何の點たる問はず、我は彼に比して渾て皆數等の上にあり。唯繁を避くるが爲めに特に其不急の點を詳述せざるのみ。吾人は之より歩を進めて、何如にせば最後の勝利を獲得せらるべき乎を述べん

第二問　我軍は何如にして彼に城下の盟をなさしめ得べき乎

此交戰の目的を完からしめんが爲めに、我軍は先づ左の編成を以て其計畫を貫かざるべからず

第一　北方軍

北方軍は、四個若くは四個半の師團を以て編成す。其目的任務は左の如し

ノウオキーエフスク、バラバーシ、アラズドリノエ、ニコリスク等を擊破して、浦汐斯德の背面を衝き、該港を占領せば、直ちに北進してハバロフカを陷落し、更に西進、黑龍江を遡りて、黑龍江州ブラゴウエシチエンスクを占領すべし

南方軍も、亦四個半若くは五個師團を以て編成し、鏡城より羅津灣の間に於て上陸し、圖們江より北折して、琿春、寧古塔、吉林、伯都訥、哈拉賓等を陷れ、齊々哈爾を占領して、墨爾根、愛琿、の線を北方軍と共に固守すべし

別に一旅團、若くは一師團を分遣して、旅順を占領し。大連灣と滿州各地との交通を遮斷すべし

北方軍の運動

北方軍は、先づ二個師團を劈頭に上陸せしめ、直ちにノウオキーエフスクを占領して、爰に後續の二個師團、若くは二個師團半の集合を待ち。バラバーシを陷れ、背面より浦汐斯德港を衝き、艦隊と共に該港を占領すべし。該港にして我手に落ちなば、直ちに北進してニコリスクを奪ひ、ハバロフカを占領して、茲に堅固なる防禦設備をなし、以て全く黑龍江の航通を斷手より奪取し、夫と同時に。他日敵が歐露及び西部亞細亞の兵を驅つて、大擧して恢復攻擊を爲すに當り、充分之に抗拒し得るの防備を施すべし。加ふるに該地は黑龍江の航通上、至要の地點にして、北軍一たびブラゴウエシチエンスクを占領せば、該軍の兵站線としては、唯此一江流あるに過ぎざるを以て、最も堅確なる防備を施さゞるべからず。是れ獨り北方軍の爲めのみにあらず。南方軍の爲めにも亦、內部の交通連絡及び兵站線として、最も切要なるものなればなり。斯くして、北方軍は、進んでブラゴウエシチエンスクを占領し、南方軍との連

絡を鞏固にし、以て平和の克復を待つべし

南方軍の運動

南方軍は、其主力の集合を待ちて、北進瑯春を陷れ、疾驅して寧古塔に出で、滿洲鐵道を該地の近傍にて占領し、以て速かに滿州各地と露領沿海州との連絡を遮斷すべし。此鐵道の占領にして充分なるに至らば、直ちに北方軍との連絡を安全にし、進んで哈拉賓を取り、此所に、北方軍のハバロフカに於けると同く、堅固なる防禦の設備を施すべし。蓋し北方軍と黑龍江との關係の如く、松花江は南方軍に取つて最も切要なるものなればなり。而して此南方軍は、漸次吉林、伯都訥等を陷れ齊々哈爾を占領して、茲に最後の防禦を設け、以て在ブラゴウエシチエンスクの北方軍と鞏固なる連絡を保持すべし

此間に於て我海軍は、其一部を黑龍江口、ニコライエフスクに分派し同港を占領して該江流に依り、內地に航行するの途を杜絕すべし

右の如く、南北兩軍の陸兵は、各々其守備地を嚴守して動かず、黑龍江口亦既に占領せられたりとすれば、西比利亞東部は、本國よりの航送品は勿論、外國よりの輸入物も一切杜絕せられて、其活路は僅かに一條の西比利亞鐵道に依るのみとならん、然

るに此鐵道線たる、前きに述たるが如く、單線にして補助線なきが故に、到底大多數の軍隊に供給すべき諸物資と、數十萬の住民を養ふべき食料とを輸送するに足らず。去れば此際、露の取るべき道は、速かに白旗を揭げて平和の克復を冀ふ歟、否らざれば、別に車馬の力を以てする大兵站線を作爲して、最後迄も其抵抗を繼續する乎の二途に出づるの外なし。然り而して其第二策は、露國今日の內情に於て、果して能く之を行ひ得べき乎。蓋し此問題は交戰の結末を了するに付、至大の關係あり、且つ終局の勝敗も亦殆んど此一事の上に存するか故に、決して輕々しく臆斷を加ふべきにあらず、然れ共、目下彼れの窮迫せる財政上より觀、又歐西列強との國際上の關係より察すれば、彼れ必ずや此第二策を取るの愚をなさゞるべし。吾人故に斷案を下して曰く、現時の狀勢に於て、日本軍は能く露軍に勝ち得べく、又能く最終の勝利をも制し得べしと

第五章　平和の施設

露の壓力政府に對して、大打擊を加ふるの結果は、必ずや革命の大波瀾を捲き起す

に至らんことは、吾人既に之を述べたり。吾人は又之に次ぎて萬全なる交戰法を開陳し、其戰勝の餘威に仗り、暗黑なる西比利亞に向つて、文明の光輝を反映せしむるの方案あることをも示せり。然れども吾人は、血腥き戰爭のみに依賴して世事を經綸せんとする窮追漢にはあらず、戰爭以外、平和の榮光の下に、優々然として大業を建設するの餘地あるを信ずるものなり。乞ふ次節に於て其概要を述べん

第一節　西比利亞の移民

西比利亞が廣漠無邊の土地たることは、世人皆之を知る。西比利亞鐵道が近世の大工事たることも、世人皆之を知る。然らば世人は其連想よりして、鐵道工事の結果、廣漠なる西比利亞をして漸次人烟稠密の鄉たるに至らしむべきことをも知らざるべからざるなり。西比利亞の今日は、山河荒涼として事業の振興するもの少きも、他日の西比利亞は、決して絕望の西比利亞にはあらざるべし。既に然り。吾人豈に此天與の良土を以て、空く豺狼跋扈の今狀に委棄するに忍んや

彼スラーブの勢力や能力やは、無限に之を發揮し能ふものにあらず。彼は今日に在つて、既に其多方面の運動に就て困弊せり。何ぞ西比利亞開拓の業に對し、迅速に其功蹟を擧ぐるを得んや加ふるに彼は制度上の腐敗を以てし、之に添ふるに經營根底上の大誤謬を以てす。若し其爲す所に委して、西比利亞の暗黑を破らんと欲せば、何の日に到つて始めて其目的を達するやを知る可らざる也。是れ實に世界人類の經濟進歩に取りて、少なからざる損亡と云ふべし。況んや列邦の人口は、連月逐歲其數を倍加し來り、而して今や之を排泄するの封土なきに苦めるに於てをや。故に吾人は天の必ず西比利亞を以て、人類一般の需用に供せられたるものなることを信ぜずんばあらざる也

西比利亞は誠に世界人類總掛りの新開墾場たらしむるに就ては、必ず之が爲めに先鞭を着くる所のものなかるべからず。而して其先鞭者は、スラーブの蠻力を打破するに足るものならざれば、之に當る能はざるなり。今時の世誰か能く此大任を全ふする者ぞ。十九世紀以來、世界人類中の第一優等者と呼ばれたる白晳人は、既に其力を以て最も近接せるスラーブの本土すら開導するの能力なし。何如んぞ更に遠隔せる西比利亞に向て其驥足を伸べ得んや。去れば人類の爲めに此大任に當るべきものは吾人君子民族を除きて復た

他に之に適當なるものあるべしとも覺へず、吾人は勘察加通漁拒絶の一些事を以て、輕々しく吾人が西比利亞經營の先途を卜すべからざる也

露人に限らず、總ての歐人が海外に於ける植民事業は、決して人道の範圍に於て行動せるものにあらず、彼等が爲す所は、悉く野武士の殘忍と野卑とを帶びたり。吾人の西比利亞經營は、彼等の徒と甚だ其撰を異にす、植民地の所有者は、天下の強大國なり、尋常一樣の蠻民を以て之を遇すべきに非ず。吾人も亦勞頭より、土地侵略の非望なし。天下の文明の爲めに文明を扶植して、文明の領分を擴大する迄なり。於是乎吾人の植民事業は、世界人類の同事業の爲めに爰に新に公明正大なる一模範を與ふるに足る。吾人は亦之に依つて、太洋的日本の實力が、世界の何邊まで發展するかを試んと欲するなり

吾人は何如なる手段を以て、此大業の實行に當るべき乎。蓋し百方其策あるべし、而して吾人の最も希望する所は、偉大なる西比利亞植民會社の設立是なり。吾人は固より此會社設立に對して、一種の見解を有す、移民の方針を一定せしむるが如き其一なり。然れ共吾人は今玆に之を詳述するの勢ひ聊か不可なる所あるを悲まずんばあらず、仍て吾人は邦人の爲めに、左に西比利亞の地力と農業とに關する吾人の

調査概要を掲げ、以て他日の參考に供するに止めんとす、

西比利亞と農業

人口の膨脹に連れて布哇、及び南北米の各邦に移民することの果して必要なりとせば、吾人は西比利亞東部の尚ほ一層前數者に增して好植民地たるとを立證するに難からず、布哇と南北米とには勞働競爭者として猛力優勢なる白色人種のあり、毎に吾同胞の移民勞働者に對して恐るべき社會上政治上の迫害を加へんとす、其資本家は又常に吾勞働者の身休を虐使し、意思を束縛し、生存上少なからざる不愉快を與へんと欲して德義の念、缺如たり、有体に言はゞ吾人は、斯かる危險なる地方に對して愛すべき吾同胞の移民を奬勵するを以て極めて不可なりとせざればあらず、否な斯くするは是れ移民に非ずして寧ろ棄民なり、埋、吾同胞をば少利の爲めに地獄に出稼せしむると同じ、故に吾人は更に前者よりも良好なる移民地を發見して多年剩餘ある吾人口の排泄所となさゞるべからざるなり

西比利亞は布哇其他に比して其氣候稍々寒冷なるは勿論なり、然れども農業を營

む上に於ては必らずしも不可能なる地方と稱すべからず、且つ其地位の我と僅かに一葦帶水を隔つるに過ぎざるを思へば移民往還の上に於て便宜を有すること、他の數千里を隔つるものに比して非常の差違なり、而して此處には白人種の如き優勢なる競爭者もなく、貪慳なる資本家もなし、特に人力の必要を感ずる點に至りては慥かに布哇其他に倍增するものあらん、唯現今の處にては彼の地に於ける資本家の奮つて吾勞力の輸入に盡力せざるを遺憾とするのみ、去れど是れ必らずしも永久不動の形勢なるべけんや

農業は暫く之を措くとするも、西比利亞鐵道起工の前後より、石工、土工、其他我勞働者の彼地に輸入されたる者、亦夥しき數に上れるにあらずや、而して其鐵道は漸く完成に近づかんとし、之が線路に沿ひたる地方は益々地力應用の心用を訴へんとし、支那人來り、朝鮮人來り、各邦人來りて茲に歸化雜居を試みんとし、開拓の氣運駸々として益々佳境に入るものゝ如し、是の故に吾人は竊に疑ふ、西比利亞鐵道は是れ天が日本民族の爲めに第二鄉國を建設せしむるものにあらざるなきやと、嗚呼西比利亞の地、何爲れぞ吾同胞の移民するものを悅び迎へざるべき

故に西比利亞に於ける現時の生產力を調査することは獨り露國の東方經略の一

端を詳にするのみならず、又是れ吾國百年の大計を畫する上に於て大々的必要を感ずる所なり、乞ふ其參考の爲めに聊か陳ずるあらん

西、烏拉爾の大山嶺より起りて東、太平洋の沿岸に連り北、氷洋を極めて南、亞細亞の中央に出で、廣袤大凡十三億エクタールの地積を有する廣大無邊の土壤、之を西比利亞と云ふ、西比利は斯る廣漠の土地を有するに係らず、氣候の寒烈なる、殖民に適せざるの地其過半を占め、露國は名に於てこそ亞細亞三分一大の廣土を領すれ、其實毫も何等偉大の利益を收むる事能はざる也、故に若し殖民上よりして西比利亞を觀察せば之を氷結界、森林界、農業界の三界に區別して論ずるを最も適當とすべく、而して此三界は固より精確に其境界を明示し能はさるも、其大體の區別の如きは必らすしも爲す可らざるに非ずして、即ち氷結界と森林界とは樹木の有無に依て區別せられ、森林界と農業界とは穀類の稔熟と否とに依りて區別せらる、西比利亞三界に就て聊か陳述せんとする所あるは此廣大無邊なる土地の果して幾許が殖民的價値を有するやを決定せんが爲なり

氷結界は北緯六十三度若くは四度の緯度を限界として其以北大凡四億エクター の地積を有する空漠の地方を稱し、地底永久氷結して樹木發生せず、夏期二三ケ月

の間表面のみ僅に融解するも、滿地盡く沼澤と爲り、薜苔其上を蔽ひ、鴨鷺鵠鷗の水禽群かり來たりて野苔を食ひ、囀鳴翱翔快樂なる夏日を消し、獸類は南方森林帶を退去して又等しく此地方に來り、鳥類を餌として食に飽き、獵者の射撃も無く、悠々として閑遊せり。然るに此快樂なる時期は極めて短日にして八月に到れば此等の鳥獸は一齊に此樂土を退かざる可らず、鳥獸一たび去れば天候俄に異色を現し、飛雪紛々北野を埋め、四面皚々一毫の黑點を見ず、諸川の河口は結氷して河水漫々一面の海を爲し、又忽ち氷結して水陸の分界を識別する能はざるに至る、而し北洋の沿岸は時々暴風を起し、波濤洶湧、陸地に打ち寄するか爲に、海岸一帶嵯峨たる氷山を築成す、如此氷結界は氣候酷寒にして僅に其夏期のみは鳥獸の樂土たるも、人類及植物の繁殖に適せず、今ヤクートスク州ヴェルゴアンスクに於ける一個年の平均温度を掲ぐれば、零下十七度にして、冬期三ヶ月間の平均は零下四十七度に下り、極寒には六十八度の低きに降る事珍しからず、而して夏季酷熱の候と雖も其温度は僅に十三度とす。左れば此の如き嚴寒の地に人類の繁殖すべきは到底其の能はざる所にして、サモエド人、オスチアーク人、ツーグッシエ人、ラムート人及少數の官吏、流罪人等の七八萬居住するのみ、土人は馴鹿犬等を飼ひ、橇を牽かしめ運搬の用

に供し、或は其肉を食ひ、獸獵を業とする外何等の職業なく、地中よりは往々にして只前世界動物の遺骨を發見し、考古學者か研究の材料に資するとあるも此廣大なる陸地の大部分を擧て毫も人類の富に關係を及さざるなり、但し近來鑛脈の探檢は此地方の注意を世人に喚起し、多數の人衆を聚合せしむるとなきに非るも、鑛屬の有無は未だ充分に探見し盡されたるに非れば其果して豊富なる可きや否やは尚今日に於て斷定し易からずとす。左れば此四億エクターの廣大無邊なる地積を有する氷結界は露國に取りて背面より來る敵の防禦塞として役立つの外何等の益する所なき無用の長物にして殖民上の價値は毫も之あらざる也

森林界は北緯六十三度より以南大凡五十五度の間に横はれる六億エクターの地積を包含し、樹木密生して其樹幹の長大なる、矗々天空を凌ぎ、暢茂して日光を遮り、千古の老木腐朽するも尚倒るゝ能はず、樹間に中立して新樹を生ずるあり、加ふるに湖澤の地多く、空氣濕潤、風力樹間に及ふ能はざるを以て夏季蒸發氣を拂ふ能はず、蚊虻等の毒虫多く發生し、家畜を害し、野獸を苦しめ、猛獸と雖も遠く遁避するに至る、故に土人は網を以て顔を覆ひ、家畜は薫煙を以て之を防ぐと雖も、此地方に慣れざる者は、衣服、網の上より群集して皮膚を刺し、甚しきは人をして死に至らしむ

るとあり。而して氣候の嚴烈なる何處も一年の平均溫度は零點下を降り、冬季の溫度は零下廿九乃至卅三度、夏季の溫度は十四度乃至十五度にして極暑の月は十七八度に上るとあるも、其冬季と稱するは半年以上の久しきに亘り、地底永久氷結して寒威の酷烈なる、夏季の比較的暖なるに比して甚しき差異ありとす、然れ共冬期空氣の靜穩なるとは强風多き西比利の奇現象にして、其鳥鵲の飛行するや空中に一條の白氣を引き、野鹿は群を爲し、肩背相摩して溫氣を取り、時々樹木巖石の寒氣の爲めに凍裂する音、數露里の遠きに響きて凄然たる光景を現するとあるも土人は之が爲め毫も恐るゝ色無く、却て空氣の靜穩なるを喜び、或は獵獸を爲し、或は旅行を爲し、以て長日の冬期を消す、然れども一朝北風猛然として起るや寒氣更に幾倍の嚴烈を加へ、土人等は悉く家に蟄居し、火を焚き僅に凍死を免かる、此の如く、森林界は樹木の發生には極めて適當し、既に松杉等の繁茂せるありと雖も其氣候は尙未だ農業を施すに適せずして、日當り好き場所に於ては穀類の生長せざることも無きに非るも、多くの攝護を要するが爲め勞する所得る所を償ふ能はず農業は到底成立の見込あらざる也、然れども此森林界に於ては曾に樹木の饒多なるのみならず、近來エニセイ河の附近殊にオレクマ河畔に於て豐富なる金坑の發見あり、今

日既に採堀に着手せりと云へば、是等鑛坑の盛に採堀せられ、材木の需要を此に取るに至らば多少の人口を吸收し、現今七十萬の人口を倍加して百萬の上に出てしむることは必らずしも期すへからざるに非ずとす

農業界は北緯五十五度以南即ち結氷界森林界の兩界を除きたる西比利の殘部を稱し、其地積大凡二億五十萬エクタールを占む、此地區と森林界との區別は氷結界と森林界との如く劃然たる區別を爲す能はずして僅に森林界に繁茂せる松杉等の常綠中に漸次樺樹の混林するに過ぎざるも、此兩界の爭ふ可らざる差異は植物發育期の稍長くして且つ高度の溫度を有し、森林界にては穀類の稔熟は頗る困難なるも、農業界に於ては現今盛に發育しつゝあると是れなり、蓋し農地として穀類を成熟せしむるには植物發育時期の平均溫度は十二度以上なるを要す、故に今若し農業界中に位置するネルチンスク市と森林界中のベリヨーゾフ市とを取り之を比較せば其最高暑の差は僅に一度に過ぎざるも、植物發育期の平均溫度はベリヨーゾフの九度に對してネルチンスクは實に十三度半を有する也、斯の如く農業界は氣候既に穀類の稔熟に適せるのみならず其地味又往々にして膏腴の地あり、殊にトボリスカヤ、トームスカヤ二州の如き最も農業牧畜に適し沃野數百里に亘り、

人口亦頗る稠密なり、殖産上西利亞の價値は只此農業界のみにありて他の氷結界は何等の關係をも有せざる也、左れば魯國に於ても之が移民の奬勵は既に久しき以前より着手せられ、現今五百萬の人口中四百五十萬人迄は魯國人にして、市府の人口五千以上を有するもの既に二十八個に及び、就中イルクートスク、オムスク、トームスクの如きは五萬以上を有し、火酒、蒸酒、麥酒、及密水釀造、鞣皮製造、獸脂及石鹼製造、蠟燭製造等の工業所々に起され、漸次開發の域に進みつゝあるを見るべし、今最近の統計に依り農業界に於ける穀類生産高を擧ぐれば左の如し

沿海州は面積一百五十六萬二千四百露方里、人口二十二萬〇五百五十七人、內男十五萬〇八百二十六人、女六萬九千七百三十一人にして穀類の播種及收獲高は

種類	播種 (プード)	收獲 (プード)
冬蒔小麥	一〇	五〇
春蒔小麥	一三四、五五八	六五七、三七二
裸麥	五九、一〇六	二七一、五〇八
大麥	一四、八八三	八八、五四三
蕎麥	三四、八四一	三八一、三九八
馬鈴薯	七〇、四八六	二五三、七九六
稷及其他の穀類	一三、〇一二	五一五、三五一
燕麥	九九、四〇六	一一一、三七八
計	四一六、三〇二	二、二七九、三四六

とす即ち種子一プードに付收獲五、四、面積一露方里に付一、四、人口一人に付一〇、三とす

黑龍洲は面積三十九萬四千九百八十四露方里、人口十一萬八千五百七十人、內男六萬六千五百九十五人、女五萬一千九百七十五人にして穀類の播種收穫高は

種類	播種 (プード)	收獲 (プード)
燕麥	二二六、九九〇	一、二八一、一三三
小麥	一三七、〇九六	九四四、四〇〇
春蒔裸麥	七一、七二六	三一六、六九一
蕎麥	二二、二八三	一三九、一六二
大麥	四、二〇五	五〇、二二〇
其他の穀物	六、〇二七	一三二、五五〇
馬鈴薯	六二、八五三	四〇七、六一九
計	五三六、一八二	三、二七一、七七六

とす即ち種子一プードに就き六、一、面積一露方里に付八、三、人口一人に付二七、七とす

ザバイカルスヤ州は面積五十七萬五千九百二十露方里、人口六十六萬四千〇七十一人、內男三十三萬八千七百二十二人、女三十二萬五千三百四十九人にして其播種及收穫高は

種類	播種 (チエトヴエルチ)	收獲 (チエトヴエルチ)
裸麥及春蒔麥	一五七、〇七六	九九三、六三九
春蒔小麥	四四、七九五	二二〇、一一三
燕麥	六〇、二八五	三一〇、八三六
大麥	一六、九六三	九一、一六五
蕎麥	一七、七五七	一一五、七八〇
馬鈴薯	三八、八三七	一八九、八二三
計	三三五、七二三	一、九二一、三五五

即ち種子一プードに付收獲五、七、面積一露方里に付三、一、人口一人に付二、九とす

ヤクートスカヤ洲は面積三百四十八萬九千六百八十九露方里人口二十六萬一千七百三十一人、內男十三萬六千〇六十一人、女十二萬五千六百七十一人にして一千八百九十六年に於ける穀物播種高は一萬九千七百二十九チエトウヴエルチ、收穫十萬二千百四十八チエトウヴエルチとす、而して又馬鈴薯の植付は二萬二千八百七十二プードにして其收穫は九萬九千〇〇八プードとす、イルクートスカヤ州は面積七十萬三千六百五十露方里にして人口五十萬六千五百十七人、內男二十六萬七千五百二十八、女二十三萬八千九百九十七人とす、而して穀類の播種及收穫高は最近の統計を缺くと雖も一千八百九十五年の調査に依れば冬蒔裸麥の播種地積八萬三千八百六十四デシヤチーナにして春蒔穀類は二十一萬九千八百十九デシヤチーナ即合計三十萬三千六百八十三デシヤチーナとす

エニセイスカヤ州は面積二百二十四萬六千〇二十七露方里、人口五十五萬九千九百〇二人、內男二十九萬一千五百五十五人、女二十六萬八千三百四十七人にして其穀類の播種及收穫高は

種類	播種	收穫
	プード	プード
大麥	五四五、五三六	二、七四二、九七三
蕎麥		二、九三五、九九五
其他の穀物		一、一四九、四四二
馬鈴薯		三、一五三、〇一九
合計	四五、六六三	三九八、九七五
	五九一、一九九	三、一四一、九四八

即ち種子一プード付收穫五三、面積一露方里に付一、四人口一人に付五、六とす

トームスカヤ州は面積七十六萬八千六百六十三露方里人口一百九十二萬九千〇九十二人、內男九十七萬〇七百八十人、女九十五萬八千三百十二人にして其播種及收穫高は

種類	播種	收穫
	プード	プード
冬蒔小麥	五六三、七五九	一、六二七、二八九
裸麥	二三〇、五四一	一、二四九、四四二
春蒔小麥	四九〇、三四二	三、一五三、〇一九
燕麥	六三〇、七六七	二、八八八、五八五

即種子一プードに付收穫五。〇面積一露方里に付一四、二、人口一人に付五、七とす

トボリスカヤ州は面積百二十一萬七千四百十露方里、人口百四十三萬八千六百五十五人、內男七十一萬二千〇八十三人、女七十二萬六千五百七十二人にして其穀物播種及收穫高は

種類	播種	收穫
	プード	プード
冬蒔裸麥	一、三三二、三五三	五、九〇一、九五八
冬蒔小麥	二、七六二	三六、八七五
春蒔裸麥	七八五、三〇五	三、四〇二、二六二
春蒔小麥	四、一五六、一五四	三二、一四六、七三五
燕麥	四、四三三、二八三	二一、六〇二、四八五

大麥	五二八、三二	二、九〇九、〇一五	
蕎麥	六八、三六	三九三、五四七	
合計	一二、三二四、四五五	五七、三三六、一一七	

即ち種子一プードに付收穫五、〇面積一露方里に付四七、一、人口一人に付三九、八とす

アクモリンスカヤ州は面積四十七萬九千二百〇〇露方里、人口六十七萬八千九百五十七人、內男三十五萬四千三百七十人、女三十二萬四千五百八十七人にして其穀類及播種收穫高は

種類	播種	收穫	
	プード	プード	
冬蒔穀物	四、九二三	一五二、五五二	
春蒔穀物	六八二、五五八	四、一四六、三八六	
燕麥	三九八、三三七	一、四七九、二五一	
馬鈴薯	一四二、八五五	五〇三、五七八	
合計	一、四四八、六七二	六、二八二、七六八	

即種子一プードに付收穫四、三、面積一露方里に付九、〇とす

セミバラチンスカヤ州は面積四十四萬二千二百四十五露方里、人口七十八萬五千一百九十七人、內男三十六萬四千八百三十九人、女三十二萬〇三百五十八人にして其播種及收穫高は

種類	播種	收穫	
	プード	プード	
冬蒔裸麥	八、三七	五三、四八一	
春蒔裸麥	一五、一三九	七六、二七四	
冬蒔小麥	四〇	二八〇	

春蒔小麥	一八三、四〇二	一、二四〇、七六六	
燕麥	七五、五二六	三八一、八一一	
蕎麥	二八	一八九	
穉	三、三五六	七三、三一七	
小麥の一種	三二六	二、三一〇	

即ち種子一プードに付收穫六、五面積一露方里に付四、七、八口一人に付二、一とす

セミレチエンスカヤ州は面積三十五萬三千四百五十露方里、人口六十七萬八千九百五十七人、內男三十五萬四千三百七十八人、女三十二萬四千五百八十七人にして一千八百九十六年に於ける穀類播種及收穫高は

種類	播種	收穫	
	プード	プード	
小麥	一九七、〇七四	七六三、五九二	
裸麥	一三、三五一	七八、一一五	
大麥	四七、四七九	二六六、七四三	
燕麥	一〇三、五〇四	五七五、七一五	
穉	一五、七六九	三四〇、一四九	
大麥	八、六〇三	六〇、〇〇七	
豌豆	九五五	五、五九二	
馬鈴薯	二五、三〇八	二一六、八二三	
合計	三一〇、九一〇	二、一一〇、八七九	
豌豆	四、三六	二一、七六八	
米	二、三六	一六、六九九	
蕎麥	六七	七七二	
玉蜀麥	一六四	七九四	
馬鈴薯	五、一九一	九二、四一七	
合計	三八九、二四八	二、〇九三、七六五	

即ち種子一プードに付收穫五、三、面積一露方里に付五、九、人口一人に付三、一とす

スウイルダリインスカヤ州は面積三十五萬六千二百露方里、人口一百四十七萬九

千八百四十八人、内男八十萬四千一百三十四人、女六十七萬五千七百十四人にして

其穀類種播、及收穫高は

平和の施設

種類	播種	收穫
	プード	プード
米	七九五、九九〇	七、四九九、八一〇
玉蜀黍	一五、二九六	一、六二九、四五〇
冬蒔小麥	八三七、三〇〇	四、七三三、七八〇
春蒔小麥	一、三二一、三一〇	八、四五七、一一〇
大麥	六四九、〇一五	四六九、四七六
稷	九五、三四五	二、一八九、三九〇
細粒稷	三四、二六〇	五二一、五一五
其他の春蒔穀物	四六、七三五	三一七、四三〇
馬鈴薯	五、八八五	七一、〇一〇
合計	三、七九一、一三六	二五、九一八、九七一

即ち種子一プードに付收獲六、八、面積一露方里に付七二、八、人口一人に一七、五とす

フエルガンスカヤ州は面積十三萬露方里、人口一百五十六萬〇四百十一人、内男八

十五萬三千二百七十九人、女七十萬七千百三十二人にして其穀類播種及收獲高は

種類	播種	收獲
	プード	プード
米	二八、五二五	三、八三一、三一三
ジウガルイ	二〇九、一六七	七、四八五、四六五
冬蒔小麥	九一五、三九六	六、九一〇、二〇八
春蒔小麥	三七六、一七六	二、七六〇、〇〇三
大麥	八四、四四〇	八七七、三七七
稷	五八、五四〇	一、一六七、四四一
其他の穀物	三二六、八六一	三、九四一、八〇七
馬鈴薯	四、八一六	一〇二、三九〇
合計	二、一九三、八七一	二七、〇七六、〇六五

即ち種子一プードに付收穫一二、三、面積一露方里に付二〇八、二、人口一人に付一七、

三とす

サマルカンドスカヤ州は面積六萬六千四百八十七露方里、人口八十五萬七千八百

四十七人、内男四十七萬二千九百十五人、女三十八萬四千九百三十二人にして其穀

類播種及收穫高は

平和の施設

種類	播種	收獲
	プード	プード
冬蒔小麥	九一、五九二	八八、三二八
春蒔小麥	七七、三七四	六二、八二三
米	二六、九〇三	三九五、八八七
大麥	六〇、〇七〇	四二九、四六〇
其他の穀類	二〇、四八五	二一五、九〇九
合計	二七六、四二四	二、四八一、四〇七

即ち種子一プードに付收獲九、〇、面積一露方里に付三、〇、九、人口一人に付二、八とす

而してサマルカンドスカヤ州は是等穀類の外亦綿の耕作に適し品質頗る佳なる

が如し其植付反別及收獲高は

種類	植付反別	收獲高
	デシャチーナ	プード
亞米利加種	一〇、六八五	四八九、八四〇
ザカスピースカヤ州	五、四五六	二三、七七〇
合計	一六、一四一	七〇八、六一一

收穫高は

露國種

七十三人、内男二十萬六千一百〇九人、女十六萬千〇八十四人にして其穀類播種及

種類	播種	收獲		
小麥	二三七、八九四 プード	二、三二七、五五八 プード	ジウガールイ	五三六	一三、一三五
大麥	四九、〇九八	四四一、九九九	米	一八〇	二、〇〇〇
胡麻	一、二四二	三八、一四七	合計	九九五、八三九	二、八二三、八三九

即ち種子一プードに付其收獲二、八、面積一露方里に付五、三。人口一人に付七、五とす而して綿の收穫高は六十二萬一千〇四十一プードとす

トウルガイスカヤ州は面積四十萬〇八百三十露方里、人口四十五萬三千一百廿三人、内男二十三萬七千六百十二人、女二十一萬五千五百十一人にして其穀類收獲高は九百四十二萬二千四百四十八プードとす、故に面積一露方里の收穫は二三、五、人口一人に付二〇、八なり

此に由り之れを觀れば西比利亞の農業は尚未た微々たる情態に在りと雖も而も種子一プードに付一二、三。面積一露方里に付二〇八、二、人口一人に付一七、三の收穫割合を有するフヱルガンスカヤ州の如きあり面積一露方里に付七二、八、人口一人に付一七、五を有するスウイルダリインスカヤ州の如きあり以て農業の絶對的絶望を意味すべからさる也而て今又更に牧畜に就き之が匹數を擧ぐれば左の如し

沿海州(一八九六年)

馬	三六、八二六	牛	五五、八二七	羊	一、七二五
豕	三一、六三〇	山羊	二二一	鹿	一九〇、六一八
牽犬	三三、三〇〇	驢	三九四	計	三五〇、五四〇

即ち一露方里に付〇、〇二人口一人に付一、五

黑龍州(一八九六年)

馬	四九。一〇〇	牛	四四、五七七	豕	一四、〇〇七
羊	五、八二五	駱駝	五〇六	山羊	四〇
驢騾	三〇	計	四、〇八六		

即一露方里に付〇、二人口一人に付〇、九

ザバイカルスカヤ州(一八九六年)

ザバイカルスカヤ州に於ける牧畜の種類別は之を知る能はざるも總數は三百三十三萬〇五百三十三頭とす、即ち一露方里に付五、一、人口一人に付五、〇とす

ヤクートスカヤ州(一八九六年)

馬	一一三、三二三	牛	二六六、三五五	羊	二六七
豕	五五	鹿	一四。〇一五	牽犬	二、五八二
計	三九六、五九七				

即一露方里に付〇、一、人口一人に付一、五

イルクートスカヤ州

馬	二六四、八五六	牛	三三五、五四九	羊	三六五、三七九

豕	八五、八六二	鹿	七七三	驢	四八、〇四五
計	一、一〇〇、四六四				

即ち一露方里に付一、五、人口一人に付一、九

エニセイスカヤ州

馬	四五〇、三〇六	牛	四一八、八五七	羊	六五七、七一六
豕	一一三、五八二	驢	一八、七五〇	鹿	二七、九二六
計	一、六九七、一三七				

即ち一露方里に付〇、七、人一人に付三、二

トームスカヤ州

馬	一、七七六、〇二四	牛	一、七九一、〇八六	驢	三
水牛	一、三三八	駱駝	四九五	羊	二、三七五、五二一
山羊	二九、五九二	計	六、五一九、七八二		

即ち一露方里に付三、九、人口一人に付一、五

トボリスカヤ州

馬	七三六、二三三	牛	七八五、五二二	羊	一、〇六八、二一八
豕	二二六、五一七	山羊	二九、五九五	計	三、〇四七、〇七六

即ち一露方里に付二、五、人口一人に付二、一

アクモリンスカヤ州

馬	八七六、六一〇	牛	五八三、二五六	羊	一、八五〇、二三一
山羊	一四五、三三五	豕	一五、八七六	駱駝	一〇二、五五一

計	三、五七三、八五九				

即ち一露方里に付七、五、人口一人に付五、五

セミバラチンスカヤ州

馬	八二二、〇一三	牛	四五二、一〇八	羊及山羊	二、三九二、五八九
豕	一、〇七五	駱駝	七三、六〇八	計	三、七四一、六七四

即ち一露方里に付八、四、人口一人に付四、八

セミレチエンスカヤ州(一八九六年)

馬	七五五、七三一	牛	四二四、七八七	駱駝	九九、一三五
羊	四、二八三、八三一	山羊	二八二、一七九	驢騾	三、七七五
豕	一四、九三二	計	五、八六四、三六三		

即ち一露方里に付一六、一、人口一人に付八、六

スイルダリンスカヤ州

馬	四六六、三〇〇	牛	四三二、一〇〇	羊	四、二六五、七八〇
豕	三、八三〇	駱駝	五〇一、二〇〇	山羊	七七五、三六〇
驢	一七、〇七〇	計	六、四四四、六五〇		

即ち一露方里に付一八、一、人口一人に付四、一

フエルガンスカヤ州(一八九六年)

駱駝	二四、七六〇	馬	三一六、一一一	驢	一五、二三六
牛	二七七、二四〇	耕作田牛	一六四、九一三	山羊	三四八、四〇四

羊	一、三三、四七九	計	二、三七〇、三三三

即ち一露方里に付一八、二、八口一人に付一、五

サマルカンドスカヤ州

馬	八二、七五八	牛	一七、八八四
羊	三六、四一一	驢	三九、四六九
計	一、四二六、四八		

即ち一露方里に付二一、六、八口一人に付一、五

ザカスピースカヤ州

駱駝	二一、八三九	牛	五〇、四四三
羊及山羊	三、三三、七八八	驢	一八、九三六
		馬	
		計	

即ち一露方里に付七、一、八口一人に付一〇、一

トウルガイスカヤ州(一八九六年)

馬	四五一、八五〇	駱駝	三三三、三〇三
牛		驢騾	九八、三二一
羊	一、二六〇、九三一		二、三六二、七二五
山羊			
計	一、六四七		

即ち一露方里に付五、九、八口一人に付五、二

右の統計に依り西比利に於ける家畜の數は農作物と共に非常に多數なりとは稱すべからざるも、極東の二州即ち沿海洲及黑龍州を除きては大底相應の頭數を有し、其最も多きは一露方里に付二一、六を有するサマルカンドスカヤ州、及一人に付一〇、一を有するザカスピースカヤ州とす

以上の如くなるが故に西比利の農業及牧畜は決して望みなき者として放棄すべからずして、若し盛に移民を奬勵し、近世の農作法に依り之を耕作し、若くは家畜の飼養に改善を施さば其進歩は更に今日に幾倍するものあらんとす、然れども現今西比利亞の各部を通ずる交通機關の備はらざる爲め、農民は收獲の過剩より利益を收むる能はず、且西比利目下の情態より言はゞ、是等農民は農業に從事するより も貨物の運搬に從事する方遙に利益なるが爲め、彼等は成るべく農民たるを避くるの傾あり、西比利の農業が今日尚幼稚の域にあるは大に遺憾とする所なり

備考　本文中統計の特に年次を記さゞるものは總べて一千八百九十七年の調査に係る

第六章　結論

露の暗黒は廿世紀の妖怪たり。彼れの蠻力はサタンの權化たらずんばあらず。故に之を退治して幽冥に驅逐するの責任は、當代文明國人が、均く分擔する所の責任たるべし。然るに歐洲文明の勢力は、彼れの如く微弱にして、露の暗黒を打破するに足らず。否一歩を過てば、却てその暗黒の爲めに、埋却せられんも未だ知るべからざることあらん歟。獨り自家の世界文明に貢献する所を盡さゞるのみならず、天下十幾億の人類は、或は復た太平歌を高唱し得るの期なきに至るべき憂ひあるべし。去れば吾人君子民族は、居常絶へず堅確不動なる自信の念を抱持して、徹頭徹尾、此大任を全ふせざるべからざる也

露の暗黒と蠻力とを打破する所以は、即ち是れ現世紀に於ける表裡衝突の武裝的平和を革新するが爲めの第一着歩なり。武裝的平和は、何が爲めに現世紀に要せられて、何が爲めに十數億の生民を苦むる歟。將た進歩せる現世紀の文明は、何に依つて禍害多き天下の兵備を撤去し得ざる歟。將た又四方に分封せる幾多の強弱貧富

の列邦は、何が爲めに虎視眈々として相對抗し、相猜疑し、相爭戰する歟。蓋し世界泰平の根底を亂るものは露なり。今の世一たび露の暗黒と蠻力とを打破するものあらんには、列邦亦始めて意を安んじ、氣を緩ふして其の兵備の幾分を撤減するを得べし。思ふに列邦の軍備たる、其太半は實に露に對する防禦的必要の上より來る。故に露を打破するは即ち天下兵備必要の根底を打破するを得ん乎。世界撤兵の實行は、畢竟五十歩百歩の間たるに過ぎず。是に至つて武裝的平和も亦何かあらん

唯夫れ歐洲の列強は、物質的進歩の上に於てのみ甚だ達したる所あり。而して未だ精神的文明の之に伴ふて開發する所あるを知らず。概して言へば、彼の文明は根底なき文明なり。氣魄なき文明なり。乞ふ史を繙きて看よ、此の如く根底なく氣魄なき浮華なる文明は、曾て一たび羅馬に於て、野蠻種族の爲めに散々に破壞せられたることあり。歐洲文明も亦猶ほ羅馬の文明の如きのみ。其發達せる所の枝葉は、即ち大に發達して進歩せざる所の大本は、依然として呉下の阿蒙たるを免れず。彼等が現に有せる大なる欠點は、蠻力をして縦横に其虚を衝かしむるの弱所を示せり。武裝的平和は乃ち彼等が足らざる所を補ふが爲めの唯一の手段たり。彼等は是を以て

漸く蠻力の侵入に備へ、漸く自家の平安幸福を維持せんとす。彼等が文明は復た此以上の智能なし。彼等豈に容易に其武裝を撤廢するの大決心をなし得んや

顧みれば、日本の文明は其前途、彼等に比して頼母しき所、極めて多きを知るべし。日本は獨り自家の天祐に於て、太洋的好精神を具備するのみならず、其地位亦期せずして東西文明の縫ひ目に當り、支那、印度、歐洲、各地の文物を吸收し、其精粹を撰擇し、之に加ふるに天下百色の宗教を輸入し來り彼を研究し、是を比較して、全國殆ど世界宗教文明の爲め、常設の博覽會場たるに似たり。而かも其宗教や、文物や、一たび爰に輸入するに及んでは、曾て互に氷炭相容れざりし性質のものと雖も、忽ち相融合し、必ず相調和して、夫の支那及び歐洲の史上に往々散見するが如く、毫も相反激牴觸する所あらず。是れ實に日本特得の美質に屬し、幷せて其胃腑の大なると、消化力の盛なるとを證するに足るものなり。去れば此際、能く日本の性を知りて、其勢を利導し得るものあらんには、未來に於ける世界の大宗教家、大革命家、大理想家は決して歐洲に生ぜずして、必然日本に出で、以て人類の爲めに無限の幸福を與へ、根底ある大文明を扶植せんこと、寸毫も疑ひあるべからず

歐洲は釋迦を生せず、孔子を産せず、キリスト、マホメットの徒、亦曾て此處には出づ

ることなかりき。是等の大思想家、大宗教家は、總て皆亞細亞の人たりし也。ヒマラヤなく、長江黄河なく、太平洋なき隘小なる歐洲の山河は、自然の感化に依る所の絶大なる偉人を育成すること能はず、天下の大なるものは亞細亞に於て悉く之を見ざるはなし。古來偉人の獨り此地に輩出する所以は、實に天粹地精の相融和して之を凝成するに依る。從つて其天稟亦自ら他と相異なるもの無くんばあらず。而して歐洲は專ら是等偉人の糟粕を嘗め、之を活用し、祖述して、漸く自家文明の素地を築き得たるものに過ぎざる也。畢竟彼等は至小なる形以下の創成力には富めり、然れども絶大なる思想界の事業に至つては、終に亞人の匹儔たるを得ざるもの也。過去既に斯の如し。當來亦必ずや彼等は日本の大思想に薫化せられ、之に依りて其多年の憂患たりし蠻力侵入の大豐隙を補塞し得、而して後他を推して世界文明の中心となし所謂る黄禍の杞憂を捨てゝ更に吾人の黄德を仰望崇拜するに至らずとは言ふべからざる也

露に垂亡の情態あるは吾人既に説明して之を悉せるを覺ふ、其垂亡の情態たる今日に在りて尚ほ未だ垂亡の情態たるに過ぎざることも亦屢々陳述せり、彼は必ずしも即時亡滅の運命には到着せざる也、言を代ふれば亡國には、尚ほ日時ありと云

ふべし。吾人乃ち座して空く自然の成敗を待つべき乎、吾人は疑ふ、吾人の希望する人類の幸福と天下の平和とは、斯くして能く速かに吾人の前に齎らし來るを得る乎。否、天職ある吾人民族に於て、大事を天運の循環に一任するは、或は是れ迂濶の極恥辱の者たらざるなからん歟、去れば吾人が自家の大任を全ふする第一着歩として一刻も早く露の〇〇を催促し、以て夫の天運に適應せしめんことは、今に於て吾人の執るべき唯一の進路たらんも計るべからず。而して吾人は何如に其〇〇を催促すべき乎

露を開導し、歐洲を感化し、延ねて以て人類一般無窮の大平和を致すの任は、今や正に吾人君子民族の肩上に懸る。吾人は此目的を達するが爲めには、時として兵を動かすことをも辭せざるべし。何となれば、兵を動かすは即ち兵を休むるの捷徑たるを知ればなり。然れども、兵は百方策盡きたる上に非んば動かすべきにあらず、天には生々の意あり、人には惡死の念あり。人道に依つて天下の經綸を行はんと欲するもの、豈に容易に兇器を提げて起つべけんや。吾人は是に於て太洋的日本を支配する政府に對し、速かに帝國の天職に悟得するあらんことを希望し、幷せて其天職遂行の責任上、出來得べくんば以下說く所の如き手段方略を採用して、君子民族の名

譽を宣揚するに勇猛果斷ならんことを强請せずんばあらざるなり

〇〇〇

をして、直ちに○○の運命に促がし到らしむるは、豈に亦天下の一大急務として大に努力せざるべけんや

露西亞論 終

明治三十四年十一月十四日印刷
明治三十四年十一月十七日發行

定價金四拾五錢

著作兼發行者 内田甲 東京市芝區神谷町十八番地
印刷者 武井達夫 東京市芝區神谷町十八番地
印刷所 八重洲橋活版所 東京市日本橋區上槇町十六番地

著作權所有

發行所 黑龍會本部 東京市芝區神谷町拾八番地
大賣捌所 東京堂 東京神田區表神保町

豫約出版廣告

露國東方經營部面全圖（幅五尺七寸二分 長五尺一寸二分）

本圖は露國が東方に於て既に占領せる封土、及び之より將に侵略せんと欲する方面、即ち西比利亞イルクーツスク以東、蒙古、滿州、遼東、全部、北京、朝鮮より浦潮斯德、沿海州、樺太に至る迄の一帶の山川地理は勿論、其他社會的、商業的、軍事的、政治的の地圖上に欠くべからざる一切要件は本會員實踏實査の上、更に某國の秘密圖を參照して巨細漏らさず悉皆之を網羅せる天下無雙の精密なる大地圖にして、特に圖上の緊要なる部分に對しては總て英漢兩樣の文字をも並記せる者なれば前きに本會の出版せる最新滿州圖同樣、學者、軍人、政治家、商業家に利益すること莫大なる可し

豫約略則　一右地圖一部　正價金四圓　豫約金二圓五十錢

一　豫約申込期限は十二月三十日迄とす豫約者は同日迄に豫約金一圓五十錢を本會に納めらるべし

二　地圖完成の期は來年二月中の豫定なり右完成配布の際に豫約者は殘餘の金額を納めらるべし

三　見本入用の方は郵券二錢を添へて申込まるべし

明治卅四年十一月

東京市芝區神谷町十八番地

豫約取次所　黑龍會出版部

神田區表神保町

東京堂

エ62.39

黒龍

露西亞朝鮮滿州の事情形勢を研究する者の爲めには天下獨歩の大雜誌なり

發行所 芝區神谷町 黒龍會
大賣捌所 神田表神保町 東京堂

最新滿州圖

定價五拾錢
郵稅貳錢

此の圖は露領西比利亞を始め旅順大連一帶の地方に於ける鐵道村落市府山川原野鑛山其他一切の事細大漏す所なく詳密に精巧に記載せるものなれば苟も同方面に志ある商人有志の座右に欠く可からざる良圖なり

東京市神田區南神保町
大賣捌所 明倫館
發行所 黒龍會